

集英社版 世界の文学 9 ボルヘス

伝奇集 エル・アレフ 汚辱の世界史

篠田一士 訳

集英社

FICCIONES

by Jorge Luis Borges

Copyright © 1956 Emecé Editores S. A.

EL ALEPH

by Jorge Luis Borges

Copyright © 1957 Emecé Editores S. A.

HISTORIA UNIVERSAL DE LA INFAMIA

by Jorge Luis Borges

Copyright © 1954 Emecé Editores S. A.

Japanese translation rights arranged through
Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo

© 1978 Shueisha



集英社版世界の文学 9

ボルヘス

一九七八年四月二〇日印刷

一九七八年五月二〇日発行

訳者 篠田一士

編集 株式会社綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三一六―五

電話 (〇三) 二三九―三八一一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇

電話 出版部 (〇三) 二三〇―六三六一

販売部 (〇三) 二三〇―六一七一

印刷所 中央精版印刷株式会社

大日本印刷株式会社

目次

伝奇集

篠田一士訳

第Ⅰ部 八岐の園（一九四一年）

プロローグ

トレーン、ウクバール、オルビス・テルティウス

アル・ムターシムを求めて

『ドン・キホーテ』の著者ピエール・メナール

円環の廃墟

バビロンのくじ

ハーバート・クエインの作品の検討

バベルの図書館

八岐の園

第Ⅱ部 工匠集（一九四四年）

プロローグ

記憶の人・フネス

刀の形

5 7 9 11 26 32 41 46 52 57 64 75 77 79 87

裏切り者と英雄のテーマ

死とコンパス

内緒の奇蹟

ユダについての三つの解釈

結末

フェニックス宗

南部

エル・アレフ

不死の人

死んだ男

神学者たち

戦士と囚われの女の物語

タデオ・インドロ・クルスの生涯

エンマ・ツンツ

アステリオンの家

もうひとつの死

ドイツ鎮魂曲

アヴェエロエスの探求

篠田一士訳

195 188 181 178 172 168 164 156 151 135 133 126 123 120 115 108 97 93

《ザーヒル》

神の書跡

アベンハカーン・エル・ボハリ、おのれの迷宮に死す

ふたりの王とふたつの迷宮

待つ

敷居の上の男

アレフ

エピソード

汚辱の世界史

篠田一士訳

初版 序

一九五四年版 序

汚辱の世界史

恐怖の救済者 ラザラス・モレル

真とは思えぬ山師 トム・カストロ

鄭夫人 女海賊

不正調達者 モンク・イーストマン

動機なしの殺人者 ビル・ハリガン

不作法な式部官 吉良上野介

仮面の染物師 メルヴのハキム

ばら色の街角の男

エトセトラ

死後の神学者

彫像の部屋

夢を見た二人の男の物語

お預けをくった魔術師

インクの鏡

マホメットの代役

寛大な敵

学問の厳密さについて

資料一覧

解説

著作年表

篠田一士

333 325 324 323 322 321 318 315 313 311 309 307 297 291 287

伝
奇
集

エステル・センボライン・デ・トールスへ

第I部

八岐^{やまた}の園（一九四一年）

この本の八篇については、ことさら解説の必要はない。八番目の『八岐の園』は推理小説である。読者は一人の犯罪者の死刑とそれに先立つすべての行為に立ち会うだろう。その犯罪者の目的を読者が知らないわけではないが、最後の段まで——とわたしには思われる——それを理解しないだろう。他の作品は幻想である。そのひとつ『バビロンのくじ』は、まったく象徴主義の影響を受けていないとはいえない。わたしは『バベルの図書館』という題の物語を書いた最初の人間ではない。その歴史及び前史を知る興味をおもちの方は、『南方』という雑誌の五十九号のあるページを参照されるとよいだろう。そこには、レウシップスとラスウィッツ、ルイス・キャロルとアリストテレスといった異質の名前が記録されている。『円環の廃墟』では、あ

らゆるものが実在ではない。また、『ドン・キホーテ』の著者、ビエール・メナール』では、実在でないのは主要人物によって彼自身に課せられた運命である。わたしが彼に付した作品のリストはあまりおもしろいとはいえないけれども、気まぐれというわけでもない。それは彼の精神史の図表を作製するものである……。

膨大な本の構成は骨が折れ、かつ、身をけずる濫費である。完全な口述の解説ならば数分ですむ一つのアイディアを、五百ページにわたって発展させてゆくことは！ もっとよい手段は、これらの本がすでに存在しているというふりをして、要約、解説を提供することである。このようにしてカーライルは『衣装哲学』を書きすすめた。バトラーは『美しい港』を書いた。これらはそれ自体が本であるという不完全さと、他のものに劣らず同語反復的であるという不完全さに悩む作品となる。より論理的で、より間のぬけた、より怠惰なわたしは想像の本についてのノートを書くほうをえらんだ。これらが『トレーン、ウクバール、オルビス・テルティウス』、『ハーバート・クエインの作品の検討』、『アル・ムターシムを求めて』である。最後のものは一九三五年からの日付になっている。最近わたしは『聖なる泉』（一九〇二）を読んだ。その全体の要旨はおそらく相似している。ジェイムズの繊細な小説のナレーター

は、Bが、AあるいはCのどちらから影響を受けたかどうかを調査している。『アル・ムターシムを求めて』では、ナレーターがBを通じて、Bの知らない、非常にはるかなこの存在を予覚あるいは予知しているのである。

— J・L・B

ブエノス・アイレスにて、一九四一年十一月十日

トレーン、ウクバール、

オルビス・テルティウス

1

わたしがウクバールを発見したのは、鏡と百科辞典との結びつきによるものである。人騒がせなその鏡は、ラモス・メヒーアのガオナ通りにある、さる別荘の廊下の奥にかかっていた。人をあざむくその百科辞典は、アングロ・アメリカン百科辞典（ニュー・ヨーク、一九一七年版）とよばれており、一九〇二年版のブリタニカの、不都合ながら忠実なやき直しである。事件はかれこれ五年前に起こった。その夜ビオイ・カサーレスがわたしと夕食をとみにし、一人称小説の雄大な構想について長々としやべっていた。そ

の小説のナレーターは事実を抜かしたり、形をかえたり、矛盾をおかしたりするので、少数の読者——ほんの一にぎりの読者だけしか、小説の背後にかくされた、恐ろしい、あるいは平凡な真実を読みとることができないだろう、というのであった。廊下のはるか奥から、その鏡はわたしたちを凝視していた。わたしたちは、（そういう発見は夜中には避けがたいものなのだが）鏡というものは、なんとなく怪奇なものを漂わせていることに気がついた。するとビオイ・カサーレスが、ウクバールの教祖のひとりが言ったことを思いだした。鏡と性交は、人間の数をふやすがゆえに忌わしいものだ。わたしがその記憶すべき言葉の出典をたずねると、彼はアングロ・アメリカン百科辞典のウクバールの項にのっているとこたえた。たまたまその別荘は（わたしたちは家具つきで借りていた）そのセットをそろえていた。第四十六巻の最後のページにはウプサーラの項目があり、第四十七巻はウラル・アルタイ語の項ではじまっていた。しかしウクバールについては一語ものっていない。少々困惑して、ビオイは索引の巻に当たってみた。彼は考えつく限りの綴りを探してみたが無駄だった——Ukbar, Uchar, Oukbar, Oukbarh……。帰る前に、彼はそれがイラクか小アジアの一地方だと言った。わたしはこれをいささか快からずきいたことを白状しなければなら

ない。この記録されていない国と無名の教祖とは、あの寸言を裏づけるために、ビオイの謙遜けんそんから出たフィクションだとにらんだからである。ユストゥース・ペルテスの地図を調べても見当たらなかったのも、わたしの疑いはますます強まった。

翌日、ビオイはブエノス・アイレスから電話をかけてきた。彼はいま百科辞典第四十六巻のウクバールの項をひろげていると言った。その教祖の名前はのっていないけれども、彼の教義に関するノートはあって、ビオイが前にくり返したのとはほとんど同じ言葉で成り立っている。文学的には少々劣るけれども、彼がおぼえていたのはこうである。性交と鏡とは忌わしいものだ。百科辞典にはこうある。霊

的認識をもつ者にとつては、可視の宇宙は幻影か（より正確にいえば）誤謬ごごである。鏡と父とは、その宇宙を繁殖させ、拡散させるがゆえに忌わしいものである。わたしは本気になって、その項目をみたいと言った。数日後彼はそれを持ってきた。これはわたしを驚かせた。リッターの精密な統計的索引ですら、ウクバールの名前について完全に脱落していたのだから。

実際、ビオイがもってきたのはアングロ・アメリカン百科辞典の第四十六巻であった。扉にも背にもついているアルファベットの見出しは、わたしたちのものと同じだった

が、九一七ページのかわりに九二二ページになっていた。つけ加えられた四ページは、ウクバールの項目で成り立っていた。それは、（読者がそのうち気づくだろうが）アルファベットの見出しをつけられていなかった。わたしたちはその後、二つの巻にはほかに相違点はないことを認めた。二つとも（わたしは前に言ったと思うが）ブリタニカの第十巻の再版であった。ビオイはそれを、セールか、なにかで買ったのである。

わたしたちはその項を注意して読んだ。ビオイが記憶していたくどりは、おそらく人を驚かすだけのことだ。その他の部分は非常にもっともらしくその作品の全体のトーンによく合っており、（当然ながら）少々退屈であった。くり返して読むと、そのものものしい散文の下に、基本的な暖味ぬみさが見出された。その地理の部分にあげられている十四の名前の中で、わたしたちにはたった三つしかわからなかった。——クーラサン、アルメニア、エルズールム——それらは本文の中に奇妙な暖味さで挿入されていた。歴史的な名前の中では、たった一人しかわからなかった。いかさま師の魔術師スメルデイスである。それはむしろ比喩ひよとして名ざされていた。記事はウクバールの境界線を正確に定めようとしているようだったが、そこに使われている地点はすべて、ぼんやりしたその地方の川や噴火口や山脈な

のであった。たとえば、南の国境はツアイ・ハルドゥンと

アクサ・デルタであり、その三角洲の島には野生の馬が繁殖しているところある。これはみな、九一八ページの最初の部分にあった。歴史の部（九二〇ページ）では、十三世紀の宗教上の迫害の結果、正統派の信者たちがこの島に逃れたので、今日に到るまで彼らのオベリスクが残っており、石の鏡が掘りだされることも珍しくない、ということがわかった。言語と文学の部は短かった。ただ一つ記憶に価する特性があった。ウクバールの文学は想像の文学であり、叙事詩や伝説はけっして現実に関わらず、ムレイナスとトレインという想像上の二地方に関するものだけである……。文献は四冊あげられていた。それにはわたしたちはまだお目にかかっていない。ただ第三の本——サイラス・ハスラムの『ウクバールとよばれる国の歴史』一八七四年版——だけはバーナード・クワリツチ書店の図書目録にのつてはいない。第一の本は一六四一年の日付で、ヨハン・フアレンティン・アンドレーの作品である。この事実は重要な意味をもっている。数年後、ド・クインシーの作品第十三巻の中で、ひょっくりその名前に出逢った。そしてそれがドイツの神学者の名前であり、十七世紀のはじめに薔薇十字の共同体を想い描いたこと——その共同体は後年彼の予示した形にならって他の人びとによって設立されたことをわたし

は知ったのである。

その夜わたしたちは国立図書館を訪ねた。地図、カタログ、地理学協会の年鑑類、旅行者や歴史家たちの手記等々をあさってみたものの、無駄だった。だれ一人ウクバールに行った者はなかったのである。ビオイの百科辞典の総索引もまたその名前を記載していなかった。次の日、カルロス・マストロナルディ（彼にわたしはその事柄を話してあった）が、コリエンテスとタルカウアノの書店で、黒と金色の表紙のアングロ・アメリカン百科辞典をみつけた……。彼ははいって行って第四十六巻をしらべたがもちろん、ウクバールについてはいささかも言及されていなかった。

2

南部鉄道のエンジニヤであったハーバート・アッシュの、わずかな色あせてゆく追憶は、アドログエのホテルの、むせるようなすいかずらのなかと、幻想的な鏡の奥にまつわっている。生きているあいだ、彼はとおかたのイギリス人のように、非實在感につきまとわれていた。死んでしまつた今では、彼が当時そうであったような幽霊でさえない。彼は背が高く気の抜けたようすで、その矩形のはおひげは

* ハスラムは『迷路の歴史』をも出版している。

かつては赤かった。彼はたしか男や、もめで子供もなかった。数年ごとに英国に行き、（彼がみせてくれた写真から察するに）ある日時計と数本のかしの木を訪ねていた。彼とわたしの父とは、親密な（という形容詞も余計な）イギリス流の友人関係になり、親密さを排除することにはじまって、ついには会話もなしですませるようになった。彼らは本や新聞類を交換し、黙ってチェスをたたかわした……。数学の本を手に、あせてゆく空の色を時おり眺めながら、ホテルの廊下にいた彼の姿が思いだされる。ある午後、わたしたちは十二進法（十二が十と記される）を話題にしていた。アッシュは、ある種の計算表を十二進法から六十進法（六十を十と書く）に転換しているところだと言った。その仕事は、リオ・グランデ・ド・スールにいる、あるノルウェー人に委託されたということだった。わたしたちはもう八年も前から彼を知っていたが、彼はその地方にいることをけっして口にしなかった……。わたしたちは、田園生活のことや、カパンガスのことや、ガウチョ（年とったウルグワイ人はいまだにガウ、チョと発音している）のブラジル語源のことなどを話したが、ありがたいことに、十二進法のことはそれ以上なにも話さなかった。一九三七年の九月（わたしたちはそのホテルにはいなかった）、ハーバート・アッシュは動脈瘤破裂で死んだ。数日前に彼はブラジルか

らの封をした書留小包を受け取っていた。大きな八つ折り判の一冊の本であった。アッシュはそれをバーにおき忘れていて、そこで、何カ月もたつてから、わたしがみつけたのである。この本をめくりはじめると、わたしは突然すーっと眩暈を感じた。このことには深入りしまい。なぜなら、いま話しているのは、ウクバルとトレインとオルビス・テルティウスの物語であつて、わたし自身が経験した内面の物語ではないのだから。イスラムの世界には、「夜の中の夜」とよばれる夜があつて、天上の扉が広く開かれ、壺の水は甘くなるという。もしその扉が開かれたとしても、あの午後の感じには及ばないだろう。その本は英語で書かれており、千一ページあつた。黄色い皮の背にも、扉のページの上にも、この奇妙な文字が読まれた。『トレインについての最初の百科辞典第十一巻 Hlaer—Jargh』日付や場所は何もなかった。最初のページと色刷りの一枚を蔽っている薄葉紙の一枚に、このような署名入りの青い楕円形のスタンプがおしてあつた。『オルビス・テルティウス』二年前に、さる海賊版の百科辞典の一卷で、わたしは実在しない国についての簡単な説明をみつけていた。今、もっと貴重でもっと手ごたえのあるものが偶然あらわれたのだ。今や未知の天体の全歴史の、厩大で、整然たる断片がわたしの手の中に入ったのだ。その建築とトランプのカード、そ